

## 2 農場HACCP認証への取組における家保の役割

西部家畜保健衛生所 ○長千恵 中口真美子  
西部農業改良普及所大山普及支所 藤永和巳

### 1 はじめに

近年、日本の畜産物は、グローバル化が進んでおり、食品の安全確保は国際的な共通課題である。日本でも、平成23年に国際規格に基づいた農場HACCP認証制度が開始されており、鳥取県ではこの農場HACCP認証への取組を事業推進している。管内では平成25年度から採卵鶏農場1農場が認証取得への取組を開始しており、準備段階として、飼養衛生管理向上に向けて改善を進めていたが(1)、その後の認証に向けた取組において、推進が滞っていた。このことに対し、家保、普及所が中心となり、キックオフの実施など、いくつかの取組を行い、それにより農場側の農場HACCP取組に対する志気が向上し、推進が可能となったので、その概要を報告する。

### 2 農場概要

当該農場は、大雛、成鶏合わせて2万8千羽規模の採卵鶏農場である。県内の小売店や生協等に鶏卵を出荷するほか、シュークリームやドーナツなどの加工品を販売する直売部門も所有し、農場から食卓までといった、Farm to tableを実践する農場でもある。

今回農場HACCPに取り組むに当たって、図1に示すように水色で囲った部門でHACCPチームを編成しており、ここに家保と普及所が協力する形となっている。



### 3 農場の問題点

この農場では、経営者である社長に確認したところ、農場HACCP取組へ意思は持っていた。そこで、経営者の意思以外にも問題がないか検討したところ、以下の問題が考えられた。

#### ①経営者の多忙

この農場では、社長をトップとして、直売所である販売部門も抱えているため、社長自身が多忙を極め、チームメンバーを招集した推進会議等の予定を組むことが難しく、推進にはマイナスになっていた。

#### ②農場内で農場HACCPの取組が周知されていない

この農場は家族の他、農場に1名、農場併設のGPセンターに15人の従業員がいるが、

そういった人間に農場HACCPへの取組が周知されていない状態であった。

### ③取引先に農場HACCPの取組が周知されていない

農場HACCPでは、原材料の供給先である雛会社や飼料会社、生産した鶏卵を出荷する業者など、取引先とのコミュニケーションが欠かせないが、そういった関係各社にも取組が周知されていなかった。

このことから、問題①に対しては、農場HACCPチームリーダーを中心として主に文書を作成する打ち合わせ会議と、社長も参加する推進会議の2種類の会議体制とし、チームメンバー全員がそろわなくてもどちらかの会議に出席できればよいことにすることで、会議を開催しやすくした。

②、③に関しては、県内の農場HACCPに取り組む他の農場を参考とし、キックオフを開催し、農場内外の関係者すべてに農場HACCP取組の周知をすることとした。

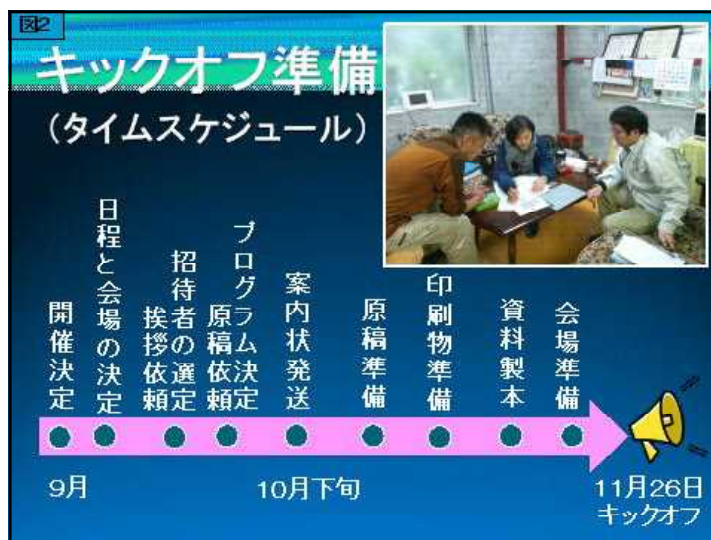
## 4 キックオフについて

キックオフとは、サッカーなどで、試合開始を意味することから転じて、企業が新しい事業を開始するときなどに、関係者を一堂に会し、スタートを宣言することである。このキックオフを行うか否かは農場HACCP認証に当たって、必須事項ではない。しかしながら関係者を一堂に集めて行うため、農場HACCPへの取組を内外に大きくアピールできること、準備に農場全体でかかることで、農場側の意識が改善し、②、③の問題点を一気に払拭できると考えられた。

## 5 準備

キックオフまでのスケジュールは図2のようにした。主催者は農場だが、家保、普及所がスケジュールを提示し、日程に間に合うように適時アドバイスする必要がある。この中で特に重要なのは、招待者の選定と、来賓挨拶の依頼である。これは、農場自身が直接取引先に連絡を取り、農場HACCPに取り組むこと、キックオフに来てもらいたい旨を相手に承諾してもらい、必然的に農場自らが動かなくてはならないため、農場の意識改革には非常に重要な役割を果たす項目である。

また、準備に当たっては、会場の選定から、開催プログラムや任命書の作成など、キックオフ開催に必要な物は、すべて自分たちで用意しなくてはならない。そういった細かい項目はシートに記入することで漏れのないようにし、原稿作成や会場の確保、物品購入などは農場にしてもらい、資料物の作成などは家保、普及所で行うなど、役割分担をするこ



とで準備を行った。

## 6 キックオフ当日の様子

キックオフ当日は農場の取引先や、県の関係者、GP センターと直売所のスタッフなど約30名ほどの参加であった（写真1）。農場には社長、農場 HACCP チームリーダーである農場長、農場スタッフのそれぞれ挨拶をしてもらい、自分たちが開催するという自覚を持ってもらうよう努めた。当日の司会や、進行補助などは家保、普及所の HACCP 担当で行ったほか、キックオフ内の農場 HACCP についての概要説明、内部検証員の選定など、平成これまでの県内で農場 HACCP に関わった職員が確保できたため、すべての項目を県の関係者のみで開催することができた。



## 6 まとめ

今回、要改善農場の体制そのものを改善したことで、結果として、管内の衛生レベルを向上させることができた。また、家保が働きかけたことによって、農場の HPAI 発生防止に対する体制をつくることが出来、農場自ら、自発的な衛生対策を実施するようになり、指導項目の改善以上の成果を得ることもできた。

養鶏農場は、防疫上の観点から、管内の養鶏農場の関係者を一堂に会して衛生対策や、鶏舎の補修方法の研修を実施するということが難しいという特有の事情がある。加えて、管内では農協の職員などが出入りすることもほとんどなく、外部からの情報に乏しい農場が多い。そのため、農場を直接巡回し、改善指導する家保の働きは非常に重要であると考えられる。今回の経験から、農場を動かすためには、画一的な指導だけではない、柔軟な対応が必要であるとあらためて痛感し、今後の農場指導にも生かして生きたいと考えている。

